

南風校区 地域課題分析シート：住民の声から描く「共助」の羅針盤

1. イントロダクション：地域の「健康診断」から始める未来づくり

本資料は、南風校区で実施された住民アンケート「校区の活動について」に寄せられた膨大な「生の声」を、地域の健康状態を測る「診断書」として読み解いたものです。

今、私たちの地域社会は、これまでの仕組みが通用しない大きな変革期を迎えています。高齢化やライフスタイルの変化、そして気候変動。これらは単なる外部環境の変化ではなく、地域の「暮らしやすさ」を根底から揺さぶる「症状」として現れています。なぜ今、住民の声に耳を傾ける必要があるのでしょうか。それは、慣例という名の「無理」を放置することが、結果として地域の繋がりを断絶させてしまうからです。

本シートを通じて、現在の南風校区が抱える課題を正しく「診断」し、住民の皆さんと行政が共に、持続可能な「共助（助け合い）」の形を再設計するためのヒントを提示します。

次のセクションでは、診断結果から見えてきた「3つの主要テーマ」を具体的に深掘りしていきます。

2. 住民アンケートから読み解く3つの主要テーマ

2.1. 「精神論」の限界：80代が支える仕組みの機能不全

長年地域を支えてきた層の高齢化により、従来の「全員参加・ボランティア頼み」の活動が、身体的・精神的な「痛み」へと変わっている現状が浮き彫りになりました。

- **現状の課題:**
 - **老老共助の限界:** 80歳を超える高齢者が組長を務め、精神的・体力的に限界を感じている。
 - **担い手の固定化と孤立:** 「できる人」に役割が集中し、役員選出が数年おきに回ってくる過酷なサイクルが発生している。
 - **身体的負担の放置:** 猛暑の中での草刈りや、しゃがみ込む作業が困難な高齢者にとって、美化活動が苦行となっている。
 - **象徴的な住民の声:**
 - 「80歳以上、組長の負担軽減を希望。体力的に対応が難しい部分がある。」
 - 「しゃがむことが困難になり、2ヶ月に1回の草取りができなくなった。外注にしてほしい。」
 - 「同じ人が自治会活動に長く関わらざるを得ない。なり手が偏っている。」
- 学習のポイント：善意のシステムダウン** 従来の地域活動は、「時間と体力のある元気な引退者が大勢いる」という昭和の人口構造を前提とした、いわば「善意のOS」で動いてきました。しかし、支え手自身が高齢化し、共働き世帯が主流となった今、このOSはバグを起こしています。「頑張ればできる」という精神論から脱却し、物理的な負担軽減をシステムとして組み込む時期に来ています。

2.2. 気候変動と安全リスク：伝統行事の「命」を守る判断

近年の酷暑は、地域交流の場であった行事を「健康を脅かすリスク」へと変えています。特に子供たちの安全や、準備を担う高齢者の体調不良が深刻な懸念となっています。

項目	伝統的な開催時期・形式	現在のリスク	住民が提案する改善案
校区夏祭り	7月・8月の酷暑期の開催	熱中症リスクが極めて高く、1時間も外にいられない。準備・片付けの負担過重。	「秋祭り」への移行(10月・11月の涼しい時期への変更)。
環境美化(草刈り)	真夏・真冬の定期実施	高温下での作業による健康被害。冬場の非効率な作業(雑草がない時期の実施)。	夏季の休止、回数の削減。シルバー人材センターや業者への外注化。
子ども神輿	炎天下での巡回	参加児童の激減、付き添う大人の体調不安。	中止または時期の変更。時代に合わせた形式の見直し。

2.3. 値値観の多様化：デジタル化と「プライバシーの安全」

情報の伝え方や行事の「目的」について、世代間での明確な温度差が生じています。また、現代特有の「安全」への意識の変化も見逃せません。

- 効率と目的の再定義(世代間のギャップ)

- 効率重視(デジタル派)：「回覧板は遅い。LINEやGoogleフォームで迅速に」「会議はリモートで」「お酒を伴う打ち上げやバーベキューは不要。その予算をゴミ袋配布などに充ててほしい」。
- 交流重視(対面・伝統派)：「ラジオ体操やスポーツ大会で顔の見える関係を」「子どもに思い出を」。一方で、「子ども向けばかりで大人が楽しめない」「AIやドローン、異文化交流などの知的探求の場がほしい」という新しいニーズも。

- プライバシーという名の「防犯」意識

- 総会資料等への「フルネーム記載」や「世帯人数の開示」に対する強い不安。「単身女性世帯であることが公になるのは防犯上、非常に怖い」という切実な声。

個別の課題を整理したところで、次にこれらの問題がどのような「社会的背景」から生じているのか、より広い視点で考察します。

3. 課題の裏側にある「社会的背景」の解説

住民から出された不満や提案の背後には、社会構造の根本的な変化が横たわっています。

- 「昭和モデル」の家庭像と現代の乖離 かつての地域活動は、専業主婦や定年退職後の男性が地域の「実働部隊」として動けることを前提としていました。しかし現在は共働きが当たり前となり、性別役割分担に基づく活動(例: 炊き出しは女性、設営は男性)や、平日の

昼間・夜間を拘束する仕組みは、現役世代にとって「住み続ける不安」を感じさせるほどの負担となっています。

2. デジタル・ネイティブ世代の「時間」に対する価値観 スマホで全ての情報が完結する世代にとって、物理的な回観板や対面会議の維持は、単なる「非効率」ではなく、生活の質を損なう要因と捉えられます。「誰かがいないと成り立たない」仕組みではなく、誰でも隙間に時間に参加できる「スマートな運営」へのアップデートが求められています。

3. 「個」の尊重と新しい防犯の形 「近所付き合い=全てをオープンにする」という古い常識が、現代ではセキュリティリスクとして認識されています。特に単身世帯の増加に伴い、プライバシーを守ることこそが「安心して住める街」の条件となっており、従来の地縁組織が持っていた「情報の透明性」を、現代的な「プライバシー保護」へとリデザインする必要があります。

最後に、これらの課題をどう「希望」に変えていくか、まとめのセクションへ繋げます。

4. 総括：持続可能な「南風校区」を創るためのヒント

今回の「健康診断」の結果に基づき、南風校区をリデザインするための3つの処方箋を提示します。

- 「引き算」による柔軟なスリム化
 - [] 「例年通り」を一度白紙にし、今の体力で無理なくできる規模（行事の一本化・縮小）に再編する。
 - [] 夏祭りの秋移行や、不要な飲食・打ち上げの廃止により、肉体的・経済的負担を軽減する。
- 「サポートー制」と外部委託のハイブリッド運営
 - [] 全ての責任を「役員」が負うのではなく、単発で手伝える住民を登録する**「校区行事応援サポートー制度」**を導入し、役割を細分化する。
 - [] 高齢者に負担の大きい草刈り等は、行政と連携しシルバー人材センター等への**外部委託（アウトソーシング）**を積極的に進める。
- プライバシーと安全を重視したデジタル活用
 - [] 役員名簿や資料は名字のみの記載、世帯情報の封筒提出など、プライバシー保護を前提とした運営に切り替える。
 - [] LINE や WEB サイトを活用し、情報の即時共有と「必要な人だけが参加できる」開放的なコミュニティを目指す。

まとめ アンケートに寄せられた厳しい意見は、この街を「見捨てたくない」という住民の熱意の現れでもあります。古い皮袋に新しい酒は入れられません。これまでの「当たり前」を一度手放し、今ここに住む人々が「無理なく、安心して」笑い合える、新しい南風校区の形を共に描いていきましょう。

【地域学習資料】住みやすさの境界線を学ぶ：糸島市南風校区の事例から

1. はじめに：なぜ住民の「生の声」から学ぶのか

都市開発の成功を測る指標は、単なる人口動態や地価だけではありません。真の「住みやすさ」は、住民が日々の生活の中で感じる QOL（生活の質）の構造に隠されています。本資料では、糸島市南風校区の住民アンケートから得られた「生の声」を基に、この街が抱える**「郊外型住宅地の構造的脆弱性」**を浮き彫りにします。

一見、閑静で美しい街並みを持つ南風校区ですが、その裏側には、健康で自家用車を自由に操れる層だけが恩恵を享受できるという「ニュータウンのパラドックス」が存在します。住民が直面している「暮らしにくさ」を分析することは、個人が持つ「移動の資本（モビリティ・キャピタル）」を喪失した際に、街が牙をむく境界線を特定する作業でもあります。

本資料では、以下の 3 つの主要テーマを通じて、持続可能な地域社会のあり方を考察します。

- **移動の資本と格差**：公共交通インフラの不備と地形がもたらす「陸の孤島」化
- **利便性の空白地帯**：日常生活を支える商業・金融サービスへのアクセス障壁
- **社会関係資本の摩擦**：防犯不足が生む「相互監視」の弊害と世代間の意識差

身体機能の変化やライフステージの進展により、昨日まで「理想の地」だった場所が、明日には「住み続けられない場所」へと変貌する。そのリアリティを、住民が最も切実な課題として挙げている「移動の壁」から紐解いていきましょう。

2. 交通アクセスの課題：移動の自由が生活満足度を分ける

南風校区において、住民の QOL を決定づける最大の要因は「交通インフラ」です。特に JR 美咲が丘駅のバリアフリー化の遅れと、地域特有の急峻な坂道は、移動の自由を物理的・心理的に奪っています。

JR 美咲が丘駅における構造的課題

住民からは、近隣駅との比較による「行政的・構造的な不平等」を指摘する声が強く上がっています。

評価項目	現状と住民の切実な訴え
バリアフリー	エレベーターが未設置。隣の深江駅にはあるのに、より階段数が多い美咲が丘駅にはないのは理解不能との批判。ベビーカーや怪我人、高齢者は利用を断念せざるを得ない。
運行の利便性	夕方以降の本数が極端に少なく、快速電車も通過する。単線区間のため、強風などの天候不順で頻繁に遅延が発生する。
駅周辺の設備	駅前にコンビニがなく、改札内にチャージ機すら存在しない。無人化によりトラブル時の対応も不安視されている。
物理的障壁	駅から国道を渡るための歩道橋がなく、大きく迂回を強いられる。特に荻浦側からのアクセスが極めて不便。

「移動の資本」を喪失した際の困難

自家用車という「移動の資本」を失った瞬間、住民は以下のような基本的な生活行動から排除されるリスクを負います。

- **買い物**：重い荷物を抱えての急な坂道の昇降。スーパーや薬局の営業時間短縮も追い打ちをかける。
- **医療へのアクセス**：高度な医療や夜間急患に対応できる施設が近隣になく、福岡市内への移動手段が限定される。
- **金融・決済**：ATM や郵便局が徒歩圏内になく、基本的な現金の管理すら遠出が必要。

So What? (だから何?) こうした不便さは単なる「手間」ではありません。この街は現在、「健康で車を運転できる大人」のみを想定した設計になっており、加齢や障害によってその要件を外れた住民を排除する構造を持っています。「陸の孤島」と化すことへの恐怖は、地域への愛着を「脱出への焦燥」へと変え、街の持続可能性を根本から揺るがしています。

3. 生活インフラと周辺環境：利便性の「境界線」を読み解く

南風校区の住民は、日常生活に不可欠な施設が「徒歩圏内」に存在しないことに対し、多大なコスト（時間・金銭・心理的負担）を払っています。

住民が切望する生活インフラと直面する代償

1. 金融機関・ATM

- **代償**：郵便局や銀行が近隣に皆無。住民からは**「サンリブやマルショクなどの身近な場所に ATM だけでも設置してほしい」**という具体的な切望が上がっています。

2. スーパー・コンビニエンスストア

- **代償**：徒歩での買い物が不可能。特に仕事帰りの利便性が低く、わずかな買い物のために国道 202 号線の渋滞に巻き込まれる心理的負担が蓄積しています。

3. 大人が休息できる公共空間（遊歩道・整備された公園）

- **代償**：サビた遊具しかない古い公園や、子供専用のスペースはあっても、大人がウォーキングしたり休息したりできる遊歩道が不足。心のゆとりが奪われています。

これらの利便性の欠如は、単に「買い物に行けない」だけでなく、夜間の人通りの少なさを生み、次のセクションで述べる「防犯面の不安」へと連鎖していくのです。

4. 防犯と安全：安心を守る「光」と「目」の不足

物理的なインフラ（街灯・カメラ）の不足は、住民に心理的な自己防衛を強いており、それがかえって地域内の緊張感を高めています。

安全性を脅かす多角的な要因

- **物理的要因（暗さと環境）**

- **夜間の暗転:** 駅から住宅地までの街灯が極端に少なく、夜歩くのが「怖い」という切実な声。
- **野生動物の脅威:** 住宅地でありながら、サル、ヘビ、イタチといった野生動物に遭遇する恐怖があり、竹やぶの管理不足も指摘されています。
- **道路構造の欠陥:** 通学路の歩道の分断や、幹線道路への合流のしにくさが渋滞と危険な抜け道利用を誘発しています。
- **社会的要因（外部者の流入と不安）**
 - **監視カメラの欠如:** 時代に逆行して設置が進まず、犯罪抑止力が機能していない。
 - **民泊と不審者:** 民泊利用客による騒音や、夜間に敷地内を覗き込む不審者の目撃情報が、住民の心理的障壁を高くしています。

社会学的視点からの考察: 物理的な防犯インフラ（光とカメラ）が不十分な場合、地域は「人間の目」による監視に頼らざるを得なくなります。これが過剰になると、後述するような住民同士のプライバシー侵害や、過度なマナー強要といったコミュニティの機能不全を招く引き金となります。

5. 近隣マナーと地域コミュニティ：共生の難しさと可能性

最後は、人々の意識の相違が生む「コミュニティの摩擦」です。ここでは価値観の多様化に対応しきれない、古い自治組織の限界が露呈しています。

地域社会における3つの摩擦構造

1. 公共空間の私物化とマナー欠如

- ペットの糞尿放置、猫の無責任な放し飼い、道路へはみ出した庭木の放置。これらは「私的領域」の管理不足が「公的空間」の質を毀損している典型例です。

2. 自治会運営の「重圧」と不透明さ

- 役員を一度引き受けると経験する**「地獄の2年間」**。負担の大きさと、役員経験回数を回覧板で管理するような古い体質が、現役世代の参加意欲を削いでいます。

3. 世代間の「価値観の押し付け」

- 新住民や若者に対し、**「子供は3人産まないといけない」「自分たちの時はもっと苦労した」**といった言葉を投げかける層が存在し、心理的な分断を生んでいます。

住み続けたい地域にするための共生チェックリスト

住民同士の「心理的摩擦」を減らし、QOLを高めるための具体的な意識改善ポイントです。

- **責任あるペット管理:** 排泄物の適切な処理（水で流す等）と、家飼いの徹底。
- **境界線のメンテナンス:** 道路へはみ出した枝の剪定、落ち葉の清掃を「近隣への配慮」として行う。
- **路上駐車の自粛:** 視界を遮る路上駐車を控え、子供たちの通学路の安全を優先す

る。

- [] **多世代への敬意:** 過去の慣習や家族観を押し付けず、多様なライフスタイルを尊重する。
 - [] **柔軟な自治参加:** 「役員回数のカウント」などの強制的な管理から、目的意識を持った持続可能な活動への転換。
-

6. まとめ：より良い地域社会を築くための「問い合わせ」

南風校区の事例は、物理的なバリアフリーの欠如が、いかにして社会的な孤立（陸の孤島化）や、地域コミュニティの歪み（地獄の役員負担や相互監視）へと繋がっていくかを示しています。

「住みやすい街」とは、以下の3つの均衡が取れている状態を指します。

1. **物理的適応:** 身体機能が低下しても駅や施設が「壁」にならないバリアフリー。
2. **機能的維持:** 買い物や金融といった生活基盤が、特定世代の努力に依存せず維持されていること。
3. **心理的統治:** 時代の変化に合わせ、個人の私生活と地域の公的義務の間に、適切な距離感と相互理解があること。

この資料を読み、あなた自身の住む街、あるいは将来のコミュニティの姿を想像してください。

1. あなたが「移動の資本（車や健康な足）」を失った時、今の街で一週間を過ごすことができますか？ その時、最も高い「物理的な壁」となるのはどこでしょうか？
2. 「防犯カメラの設置」と「住民同士の監視」について、あなたはどちらがより精神的な安心感（あるいは負担）を感じますか？
3. 「地獄の2年間」と表現されるような地域役員の負担を、テクノロジーや専門家への外注によって解消するとしたら、あなたはどれだけのコストを支払う価値があると考えますか？

本資料を通じて、単なる「便利・不便」の先にある、地域社会の構造的な課題について理解を深めていただければ幸いです。

地域貢献のステップガイド：あなたにできる「はじめの一歩」

1. はじめに：地域貢献の新しい捉え方

「地域貢献」と聞くと、何か大きな志や特別な技術が必要だと思われがちですが、決してそうではありません。私たちの活動の根底にあるのは、南風・美咲が丘地区の皆さんがあなたにアンケートで寄せてくださった「何か困ったことがあれば声をかけ合える、住み良い街であってほしい」というシンプルで切実な願いです。

地域貢献とは、特別な誰かのための活動ではなく、あなた自身の「安心で快適な暮らし」を守るために日常生活の延長線上にあります。今の生活を大切にしながら、無理なく始められる「貢献のグラデーション」を一緒に見ていきましょう。

2. 【レベル1】日常生活から始まる「基盤の貢献」

最もハードルの低い貢献は、自分の生活範囲を整え、地域への「関心」を形にすることです。これらは、忙しい方や体力に自信のない方でも今すぐ始められる重要な「基盤」となります。

- **門灯・玄関灯の点灯（防犯への無言の協力）** 「夜道を明るく照らす」ことは、それだけで犯罪抑止につながります。物理的な労力をかけずに、街全体の安全性を高める非常に有効な手段です。
- **自宅周りの清掃と管理（景観維持と環境美化）** 自宅前の遊歩道の落ち葉拾いや、道路へはみ出した枝の剪定、雑草取りといった小さな手入れが、街全体の資産価値と心地よさを支えます。
- **金銭的な貢献（組織運営の維持）** 「忙しくて活動に参加できない」という方も、自治会費や税金を滞りなく納めることで、地域の街灯維持やゴミステーション管理といった公的なサービスを支える立派な担い手となっています。
- **マナーの遵守（信頼の構築）** ゴミ出しルールの徹底や、散歩中のペットのフンの処理、安全運転の励行。これらは「地域に負担をかけない」という、最も基本的かつ不可欠な貢献の形です。

繋ぎの一文： 日常の習慣が整ったら、次は「周囲との協力」に目を向けてみましょう。

3. 【レベル2】仲間と共に歩む「共同・美化活動」

地域の清掃活動や行事に参加することは、街を綺麗にするだけでなく、有事の際の「共助（助け合い）」のネットワークを編み直す作業でもあります。

活動内容	参加することで得られる地域・個人へのメリット
定期的な一斉清掃・公園の草刈り	遊歩道（歩道）の安全確保。業者任せにできない細かな箇所の美化により、街への愛着が深まる。
地域の行事への積極的参加（祭り・文化祭）	「顔見知り」を増やすことで、災害時の安否確認や救助がスムーズになる（防災力の向上）。
ゴミステーションの管理・掃除当番	ステーションを清潔に保つことで、不法投棄を防ぎ、地域の防犯意識の高さを外部に示すことができる。

繋ぎの一文：行事での交流が進むと、お互いの「安心・安全」を守る意識が芽生えてきます。

4. 【レベル3】地域の安心を支える「見守りと声掛け」

周囲への能動的な関わりは、地域の「防犯・福祉」の質を飛躍的に高めます。

1. 「ながら見守り」のアクション 庭の手入れ、自宅前の掃除、あるいは犬の散歩の時間を、意識的に「子どもたちの登下校の時間」に合わせることです。特別なパトロールではなく、日常の動きの中で周囲に目を配る「*incidental monitoring*（付随的な見守り）」が、不審者を寄せ付けない街を作ります。
2. 挨拶による「顔の見える化」 すれ違う人への笑顔の挨拶や、近隣の高齢者へのちょっとした声掛けです。これにより「誰が住んでいるか」を把握でき、異変にいち早く気づける関係性が築かれます。
3. 積極的なパトロール活動 青色防犯パトロール車（青パト）への同乗や、ウォーキングを兼ねた夜間巡回です。「守られている街」であることをアピールし、犯罪の芽を摘み取ります。

繋ぎの一文：周囲への配慮が深まると、自分の経験や知識をより直接的に活かしたいという想いにつながります。

5. 【レベル4】スキルと情熱を注ぐ「専門・運営貢献」

仕事で培ったスキルや長年の経験を活かし、地域の課題解決や仕組み作りをリードする貢献です。

あなたの「得意」を活かす方法

- 専門知識・スキルの提供
 - 【交通問題の分析】 → 事故多発地点の分析に基づき、市や警察へ「道路の凹凸設置」や「標識改善」を具体的に提案。
 - 【防災の知恵】 → 神戸での震災経験などを活かし、地域独自の防災マニュアル作成や避難訓練を企画。
 - 【教育・文化】 → 墨絵教室、リトミック、お菓子作り、日本語指導など、特技を活かしたコミュニティサロンの運営。
- 組織のアップデート（スクラップ・アンド・ビルド）
 - 【デジタル化の推進】 → アンケートや連絡網の電子化、ホームページ管理を行い、現役世代が参加しやすい環境を構築。
 - 【行政区の見直し】 → 「時代に合わない古い慣習」を解体（スクラップ）し、隣組の再編や役員構成の改善を立案（ビルド）。

繋ぎの一文：最後に、今のあなたに最適なスタート地点を確認しましょう。

6. 学習者へのガイド：自分に合った「関わり方」の診断

住民の皆さんのが「生の声」に基づいた、世代別のヒントです。

- 現役・子育て世代（スキルはあるが時間が限られる方）

- アドバイス: 毎日の「門灯点灯」や「ゴミ出しマナー」を徹底するだけで十分な貢献です。デジタルスキルのある方は、年に数回の資料作成など「在宅でできるスポット支援」から始めてみませんか？
 - シニア世代（地域の歴史を知り、時間に一定の余裕がある方）
 - アドバイス: 体力的な無理は禁物です。散歩中の見守りや、玄関先での掃除を通じた声掛けなど、身体に負担のない範囲での「見守り役」として、その豊かな経験を地域に還元してください。
-

7. おわりに：持続可能な地域づくりのために

地域貢献において最も大切なのは、「無理なく、できる範囲で」 続けることです。

人との関わりが苦手な方もいれば、身体的な理由で動けない方もいらっしゃるでしょう。専門家の視点からお伝えしたいのは、「他人に迷惑をかけない生活をする」ことこそが、地域活動のすべての土台となる「コミュニティ・トラスト（地域の信頼基盤）」であるということです。

一人ひとりが自分なりの「はじめの一歩」を認め合い、支え合う。そんな**「幸せだと思える場所」**を、今日ここから、一緒に作っていきましょう。まずは、玄関先の灯りをつけることから始めてみませんか？